

上野殿御返事

建治元年七月一六日 五四歳

むぎ^麦ひと^一つ、かわ^櫃のり^蠶五条、は^把じか^蠶み^把六は給び了んぬ。いつもの御事に候へばをど
ろかれず、めづ^珍らしからぬやうにうちをぼへて候は、ぼむ^凡ぶ^夫の心なり。せけん^世そう^間そう^忽
なる上、を^大み^宮やの^造つ^造くられさせ給へば、百姓と申し、我が内の者と申し、け^飢か^渴ちと申
し、もの^物つ^作くりと申し、いく^幾そ^許ばく^暇こそいとまなく御わたりにて候らむに、山のなかの^住す
まい^居さ^思こそとをもひやらせ給ひて、とりの^鳥かい^卵ご^子をやしなうがごとく、ともし^灯び^油にあぶ
らを^枯そう^草るがごとく、かれ^雨たる^雨く^雨さにあ^飢めの^乳ふるがごとく、う^飢へ^乳たる^乳子にちをあたうる
がごとく、法華經の御いのちをつがせ給ふ事、三世の諸仏を供養し給へるにてあるなり。
十方の衆生の眼を開く功德にて候べし。尊しとも申す計りなし。あなかしこあなかしこ。
恐々謹言。

七月十六日

日 蓮 花 押

進上 上野殿御返事